様式第3号

自己評価報告書（最終報告）

報告者	言語系コース（国語）／小島明子

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

Ⅰ．学長の定める重点目標

Ⅰ－1．教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが（平成24年8月28日）、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1．目標・計画

①授業内容

従来「古典文学」が必要となるのは中学校・高等学校の教員を志望する学生に限られ、小学校の教員を目指す学生は「古典文学」の学習に関して熱心とは言いがたい状況であった。ところが、「新学習指導要領」では小学校においても「伝統的な言語文化」が取り入れられることが明示された。小学校で初めて「伝統的な言語文化」に降れる児童に、その発達段階に応じた授業を展開することが求められているのである。これに対応し、大学の「古典文学」の授業内容も、中・高校で要求される文法を踏まえた上での正確な解釈を行う授業だけでなく、文法には触れることなく、古典の世界へ楽しく誘うことを主旨とする授業をも合わせて実施する。

②授業方法

日本の古典文学の概要をつかむ文学史の授業は講義科目であるが、学生にはまず音読を課し、古典への苦手意識を払拭するようにする。続いて、読解においては各種のレベルの設問を用意し、それについて学生相互で話し合ったり、個人で考えたりすることによって、作品に対する興味・関心を喚起しつつ、より深い理解ができるように授業の組み立てを工夫する。

③成績評価

教員養成大学に在籍する学生はやがて児童・生徒に授業をし、また評価をする立場になる者が大多数であるが、児童・生徒を正しく評価するためには、まず自分自身の学びの取り組みを客観的に見つめ、評価する力が備わっていることが必要である。そこで授業において、学生に該当科目の学びに関して自己評価をさせ、それを踏まえた上で、教員側から成績評価をする。

2．点検・評価

①授業内容

「新学習指導要領」において小学校でも「伝統的な言語文化」が取り入れられたことから、中学校教育専修の学生のみならず、小学校教育専修の学生も古典文学の教材研究力や授業展開力が求められているため、小学校の現場でも役に立つ教材（『平家物語』『御伽草子』など）を使用した。また、文法を踏まえた上での正確な解釈にのみ拘泥せず、古典の世界観を味わえるような内容重視の授業を展開した他、実際の授業でも使うことができる設問・発問づくりを取り入れた。

②授業方法

講義科目の中でも、その時間の教材に関する小課題を用意し、学生自身が調べたり、考察したり、あるいはその結果をグループで話し合ったりさせるようにし、作品に対する理解や興味が深まるように工夫した。さらには、個人もしくはグループの検討結果を授業中に全員の前で発表させ、クラス全体の読解能力・理解力を高めてゆけるように授業を組み立てた。

③成績評価

演習科目では、担当学生の発表後、まず本人に今日の発表についての問題点を尋ね、自分自身の取り組みを客観的に振り返らせた。その後、クラスの他の学生にも意見を求め、発表の優れた点・取り入れたい点、また逆に問題がある点を指摘させた。積極的に発言をする者は最初は少なかったが、回数を重ねる内にそれに対応できるようになり、次第に評価能力を涵養することができた。

Ⅱ．分野別

Ⅱ－1．教育・学生生活支援

1．目標・計画

①昨年度は1年生の担任であったが、今年度は持ち上がって2年生の担任となることになる。4年間の中で最も学習意欲が弛緩しがちな学年であるため、前期・後期それぞれの始めに個人面談の時間を持ち、学生個々の状況把握をすると同時に、適切な指導を行う。
②演習科目においては、古典文学に関する個人の能力を勘案した上で、現時点から最大限にその力を伸ばしてゆけるよう指導を行う。
③講義科目においては、学生が受身で授業を聞くだけにならないように適宜、課題を課し、知識を実践にげることができような理解力・思考力を養う授業を提供する。

2．点検・評価

①2年生の担任として、前期の開始時に学生と個人面談を行い、1年次の成績を参照しながら学習に関する指導を実施した。また、学生の一部に授業への出席状況が思わしくない者もいたため、家庭の状況、本人の生活態度や意欲などについて話を聞き、生活面の指導も行った。その結果、当該学生は後期の後半から出席状況が改善し、3年生への進級に向けて意欲を取り戻しつつある。
②演習科目として、前期には「国文学特論Ⅱ」（学部3年生対象）があり、『平家物語』をテキストに授業を行った。その際、各学生に2～3回以上の事前指導を行い、古典文学が苦手な学生には能力の底上げを図る一方で、当該科目を得意とする学生には語釈・読解・設問作りなどの能力をさらに高度化できるよう課題を与えた。後期には「語学・文学総合演習Ⅱ（国文学）」（学部3年生対象）で、『御伽草子』をテキストに、古典文学の読みを一層深めてゆけるように、さらにレベルアップした教材研究を課し、発表が充実するよう事前指導を行った。
③講義科目としては、前期に「国文学Ⅱ」（学部2年生対象）を開講した。これは中学校・高等学校の教科書に頻出する古典文学作品を時代順に学ばせるもので、15回の授業で1回目は通史的な授業を行い、残りの14回で14作品を取り上げ、その特質・受容と享受などを講義するものである。ただし、学生が講義を聴くだけで終わらないよう、授業の最後に総括となる課題を記入して提出させることで理解の定着を図った。

Ⅱ－2．研究

1．目標・計画

①平成24年度に引き続き、今年度も『栄花物語』の異本系本文「富岡甲本」についての調査を進める。前年度は、「富岡甲本」三十巻のうち、特に巻二十七～三十を中心に検討を行ったが、今年度は三十巻全体を検討対象とし、全体の異同傾向を明らかにする。と同時に、『栄花物語』続編（巻三十一～四十）を切り離し、正編三十巻のみを独立させ独自本文とした「富岡甲本」の作成意図を、文化的背景・社会的背景の中で考察し、論文にまとめる。
②『今鏡』に関する論文を今年度末（平成26年3月末）までに書くよう、新典社から依頼がなされているが、『今鏡』は、現在取り組んでいる『栄花物語』と同じ歴史物語というジャンルに属し、『栄花物語』からの影響も従来から指摘されている作品である。この『今鏡』について、新たな切り口から検討を進めて論考をなす。

2．点検・評価

①研究課題「『栄花物語』本文の変容と再構築についての研究」について平成25～27年度、学術研究助成基金助成金・基盤研究（C）を交付されることとなり、研究計画に従って研究を推進した。
②『栄花物語』の異本系本「富岡甲本」三十巻のうち、特に巻二十七～三十を中心に調査し、その結果を論文「『栄花物語』富岡本増補記事の検討 —巻二十七～三十に着目して—」とした。これを雑誌『日本文学』に投稿して、審査を受け採用が決定、平成26年中に掲載される予定である。
③『今鏡』の帝王紀について調査を進め、論文「『今鏡』後三条紀の叙述意識」を執筆した。これは加藤静子・桜井宏徳編『王朝歴史物語史の構想と展望』（新典社、平成26年12月刊行予定）に掲載されることになっている。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

①大学院入試委員に残留することとなっているので、委員として大学院入試の適正な実施と大学院学生定員の充足に向けて努力する。
②職員労働環境協議会の過半数代表として、教職員の労働環境を守るために積極的に取り組む。
③セクシュアル・ハラスメント等に係る相談員に新たに任命されることになっており、相談があった場合には真摯に対応する。

2. 点検・評価

①大学院入試委員会において、コース選出の一委員として入試の適正な実施のために力を注いだ。さらに、今年度は副委員長として委員長を輔佐し、委員会全体のまとめ役としての任も果たした。5月・6月の学内説明会の進行にあたった他、10月には学外の説明会（福岡・岡山）に出席し、全体説明を行った上で、志願者の個別の相談にも対応した。
②職員労働環境協議会の過半数代表として、4月の総会が円滑に行われるように取り組み、また折々の問題の検討にあたった。
③セクシュアル・ハラスメント等に関わる相談員に任じられたが、1年間を通じて相談を受けることはなかった。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携，国際交流等

1. 目標・計画

①学部2年生の授業「初等中等教科教育実践Ⅱ」で、附属中学校で2回の学生による授業が予定されているが、この実践に関して附属中学校の担当教員と協力し合い、充実した授業展開ができるよう努める。
②附属校の教員との連絡協議会に参加し、附属校の現状についての理解を深め、学生指導に生かす。
③9月の教育実習期間には附属校で学生の授業を参観し、附属校の教員と協議した上で適切な指導を行う。

2. 点検・評価

①後期に開講した「初等中等教科教育実践Ⅱ」では、12月に附属中学校の教員に来学をお願いし、学生が授業中に実施した模擬授業を見ていただき指導を賜った。また1月には附属中学校に行き、実際の授業を参観させていただいた。これらの実践的な工夫により、学生が模擬授業に取り組む意識が高まり、授業のスキルの向上が認められた。
②附属校の教員との連絡協議会に参加して附属校の現状を聞き、学生への指導に生かした。また、次年度の教育実習について打ち合わせをし、実習において予想される問題点についての対応などを話し合った。
③9月の主免教育実習期間に附属中学校で学生の授業を参観し、附属校の教員と連携しながら、個々の学生の状況にあった指導・助言を行った。

Ⅲ. 本学への総合的貢献（特記事項）

大学院入試委員会において、副委員長として委員長を輔佐し、委員会全体を主導する任を果たした。また学内説明会のみならず、学外の説明会の説明業務・相談業務にもあたり、定員充足に向けて、真摯に努めた。